OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	調査報告:五箇山真木集落36年後 ： 待遇表現体系の拡散
Author(s)	辻, 加代子; 金, 美貞
Citation	阪大日本語研究. 2009, 21, p. 183-198
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』21（2009）

調査報告：五箇山真木集落36年後
―待遇表現体系の拡散―

Reports：Gokayama Honorific System : 36 Years After

辻　加代子・金　美貞
TSUJI Kayoko・KIM Mijeong

キーワード：五箇山真木方言・リーグ戦式全数調査・待遇表現体系・人称代名詞・尊敬語

要旨

1971年に富山県五箇山の真木集落で敬語行動をめぐるリーグ戦式全数調査が行われ、伝統的な家格が集落構成員全体の敬語形式の運用を規制していることが確かめられた。その約10年後、継続調査が行われ伝統的な敬語行動の変容が報告された。最初の調査から36年後の2007年、集落の敬語行動のさらなる変容の様相をみるために同一手法による調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

（1）伝統的な家格による運用はほぼ姿を消した。敬語運用の軸は個人差の大きいものとなり、親疎、ウチソト、年齢、社会的地位などを軸とした運用が認められた。青年層インフォーマントは、対称詞では標準語的な運用を行う一方で、第三者待遇では、面と向かっては敬語を使わない人を話題にして方言の尊敬語を用いるという標準語とは異なる運用をしていることが認められた。

（2）伝統的な形式は人称代名詞では姿を消し、尊敬語（助）動詞でわずかに現われている。2回目の調査から現れた新形式「アンタ」や「イカレル」の類は全世代で活発に使用されている。主に集落外の人物を相手にして標準語の尊敬語、謙譲語、丁寧語の使用が認められた。丁寧語は集落内の人物には第三者待遇の回答に現われた。

全体として敬語運用の軸や語形の待遇的価値において話者毎の違いが顕著であり、待遇表現体系の拡散の様相を呈している。

1．はじめに

富山県南西部、岐阜県･石川県の県境、庄川上流の山間部にある越中五箇山郷は地理的、社会的に長く外界から隔絶されてきた秘境であった。その地域で話されている五箇山方言については待遇表現に関しても古い特質を残しているとされる。早くは高桑（1939）により階級意識が方言の代名詞、助詞の使い分け、動詞、家族の呼び方に現れていることなどが報告されている。真田（1973）では、五箇山郷に属する真木集落全員を対象とした社会言語学的なリーグ戦式全数調査（1971年実施、以下第1次真木調査と記す）により、伝統

的な家格[1)]を軸とした敬語形式の使い分けの認められることが検証されている。この調査は地域言語の待遇表現体系のあり方を社会構造との関連で分析した初めての研究でもある。

第１次真木調査からおよそ10年を経た1982年と1983年に、同じ手法による継続調査（以下、第２次真木調査と記す）が行われ、五箇山郷における急速な観光地化、急激な過疎化の進行といった社会情況の著しい変化を反映した伝統的な家格による使い分けの崩壊現象や、平野部からの新形式の浸透など敬語行動の変容が明らかにされている（真田1983）。

さらにその後十数年を経た1995年、1996年の両年に同じフィールドにおいて待遇表現形式の運用実態についての調査が行なわれ、新形の進出、その伝統形との競合、待遇価値の個人によるユレ、同じ人物が第三者場面において対者場面より低く待遇されているなどの結果が明らかにされている（姜1997）。

五箇山郷では第２次真木調査以降も、菅沼合掌造り集落の世界遺産への登録（1995年）、東海北陸自動車・五箇山ICの供用の開始（2000年）、近隣８町村と合併して南砺市になる（2004年）など、さまざまな面で社会的変化の波を被っている。2008年７月には東海北陸自動車道が全線開通し、中京圏との時間・距離が大幅に短縮され、交流人口の増加が見込まれる。その一方で、第２次調査の際指摘された過疎化も一段と進んでいる。このような状況にあって、真木集落においては敬語行動のさらなる変化が予測されるところである。

真田（1973）で示された最初の調査から36年を経た2007年８月、真木集落で、過去２次にわたって実施された調査とほぼ同じ内容の調査を行い、興味深い結果を得たので、以下に報告したい。

２．調査について

今回の調査（以下第３次真木調査と記すことがある）対象地は第１次および第２次真木調査と同一で、富山県南砺市真木（旧東礪波郡上平村真木）である。

調査は2007年８月４日に行った。以下で報告する内容は、大阪大学大学院文学研究科真田研究室でのフィールドワークとして行われた五箇山調査の、全体テーマとは別の自主的調査に該当する部分であり、本稿の執筆者および齊藤瑛子が調査の立案・実行にあたり、執筆者が結果を集計し考察したものである。

《インフォーマントおよび集落構成員》

調査対象地である真木集落の現構成員と本稿分析時のIDを表１に示す。

集落の戸数は現在５戸（第１次調査時は６戸、第２次調査時は実質４戸）である。表中「分析時のID」の左端に示したn，t，j，k，mはそれぞれ屋号の略称である。n家とt家は本家分家の関係にあり、m家は新しく転入した家族である。屋号に続く数字は年齢を表わす。n80男は本家の当主。t38女は真木集落出身だが婚姻により他集落に転出している。

表１　真木調査インフォーマント及び集落構成員　（網掛けは今回のインフォーマント）

分析時のID	図1参照
n 80 男	n―3
n 79 女	n―4
n 54 女	n―6
t 89 女	t―2
t 63 女	t―4
j 101 女	j―1
j 78 男	j―2
j 75 女	j―3
k 81 女	k―4
k 50 男	k―6
m 50s 男	m―1
m 50s 女	m―2
t 38 女	t―8

図１に集落の親族関係と屋号、第１次調査以来の集落内各戸の家族構成の概念図を示す。

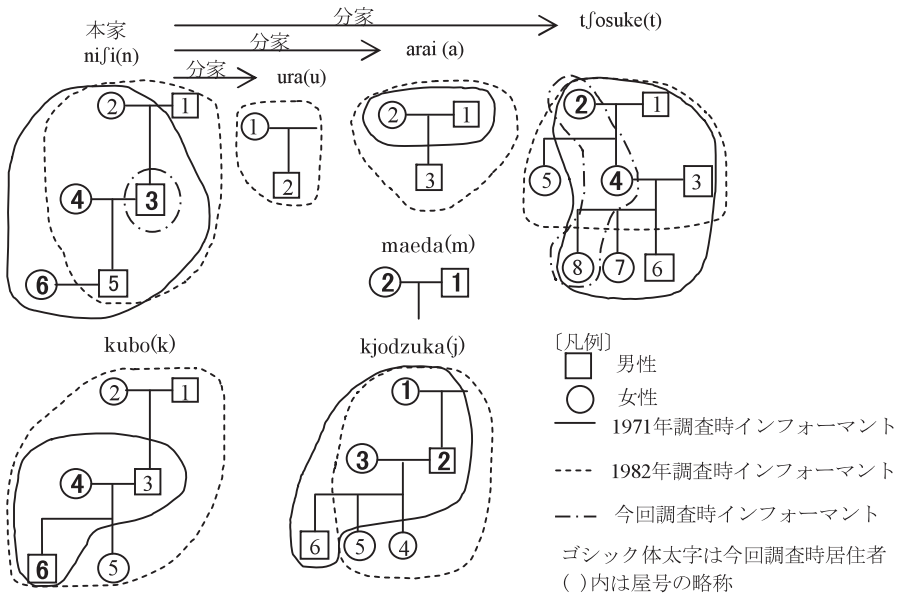

図１　真木集落概念図

集落構成員数は現在12人で、第２次調査時より10歳以上の構成員数だけでも６人減少しており、65歳以上人口が半数以上を占めている。まさに限界集落[2)]だと言えよう。

表１と図１を照合すればわかるように今回の調査のインフォーマントは４名で、全員第２次真木調査のインフォーマントであり、うち３名までが第１次調査のインフォーマントでもある。今回、インフォーマント数が４名に留まったのは、それが調査時に協力が得られたぎりぎりの人数であったこと、４名とも集落生え抜きの話者であり代表性が高いと判断したことによる。

《調査方法》

調査方法は基本的に調査票による面接調査である。

調査では、話し相手としてインフォーマント本人以外の集落構成員全員（表１に示した人物）を想定してもらった。さらに集落外の人物として学校の先生（町部から赴任している先生）、新屋のごぼさま（隣地の僧侶）・まったく知らない旅行者（サトの人らしい人、同性・同年代・富山県平野部の方言を話す人）、まったく知らない旅行者（同性・同年代・富山県以外の方言を話す人）を想定してもらった。上記の人物のうち「旅行者」は今回の第３次調査で新しく加えた設定人物である。

なお、集落構成員に関してはあらかじめ確認しておいた呼び方をリストに記し提示した。

調査項目は、対称詞・自称詞・話し相手待遇表現・第三者待遇表現であり、調査文は真田（1973，1983，1990）に示された第１次、および第２次真木調査と同じものを用いた。

以下の３節から６節に調査項目毎に順次調査結果と考察を示す。

３．対称詞

話し手が話し相手に対して用いる対称詞は次のような場面を設定し、質問した。

調査文 **〈周囲に相手のほか誰もいないとき、持ち主のわからない傘をさして〉**
「これはあなたの傘ですか」と聞くときの言い方を教えてください。

表４に、「あなた」にあたる部分として回答された形式を示した。表では縦軸に話し相手として想定してもらった人物を年齢の高い構成員から降順に並べてある。

ここでは、第１次調査及び第２次調査の結果と照らし合わせてみることにする。表２及び表３は、それぞれ第１次調査と第２次調査の結果から、今回のインフォーマントの回答

を抜粋して作ったものである。表中の話し手（＝インフォーマント）及び話し相手の年齢はそれぞれ調査時の年齢である。

表２　対称詞：第１次（1971 年）調査

話し手／話し相手	t52女	n44男	t27女	
j65女	アンニャ	アンニャ	アンニャ	ー
t52女		アンニャ	アンニャ	ー
k44女	アンニャ	アンニャ	アンニャ	ー
n44男	オマイ		オマイ	ー
n43女	オマイ	ワリ	オマイ	ー
j43男	アンニャ	アンニャ	オマイ	ー
j39女	アンニャ	アンニャ	アンニャ	ー
t27女	ワリ	アンニャ		ー
	ー	ー	ー	ー
	ー	ー	ー	ー
	ー	ー	ー	ー
k15男	ワリ	ワリ	ワリ	ー
	ー	ー	ー	ー

表３　対称詞：第２次（1982 年）調査

話し手／話し相手	t64女	n56男	t38女	t14女
j77女	アンニャ	アンニャ	オマイ	☆
t64女		アンニャ	☆	☆
k56女	アンニャ	△	オマイ	☆
n56男	オマイ		△	☆
n55女	オマイ	ワリ	△	☆
j54男	アンニャ	オマイ	△	☆
j51女	アンニャ	△	△	☆
t38女	ワリ	△		☆
n30女	△	△	△	N
	ー	ー	ー	ー
	ー	ー	ー	ー
k26男	△	△	△	N
t14女	N	△	●	

表４　対称詞：第３次（2007 年）調査

話し手／話し相手	t89女	n80男	t63女	t38女
j101女	☆	△	☆	☆
t89女		△	☆	☆
k81女	☆	△	△	☆
n80男	●		△	☆
n79女	●	●	△	☆
j78男	●/☆	△	●	☆
j75女	☆	△	△	☆
t63女	△	△		☆
n54女	☆	●	Nサン	Nサン
m50s男	◆の☆	●	◆サン	NR
m50s女	☆	△	☆	NR
k50男	☆	●	△	Nチャン
t38女	△	△	△	
学校の先生	T	△	T	T
新屋のごぼさま	オテラサン/ワカサン	△	オテラサン	寺号サン
旅行者（サト）	＊サン	△	＊	＊サン
旅行者（県外）	＊サン	△	＊	＊サン

〔凡例〕
●オマエ　△ アンタ
☆ 親族名称　N 名前
◆ 屋号　T センセー
＊ オタク　NR 無回答

対称詞に関して過去二回の調査では次のようなことが指摘されている（真田1973, 1983）。

〔第１次真木調査〕

中年層以上の話し相手に対して「オマイ」「アンニャ」、話し手の家族および若年層の話し相手に対して「ワリ」が使われていた。待遇度の段階はオマイ＞アンニャ＞ワリの順で、「オマイ」は本家として優位にたっているｎ家の人に対して使われ、家格を軸とした対称詞の使用が見られた。

〔第２次真木調査〕

敬意を含まない「ワリ」の衰退や、新形式の「アンタ」の増加、若年層による親族名称

や名前による直接的な名称の使用が確認された。また、「オマイ」の使用に家格による使い分けは認められないという変容も明らかになった。

第3次調査の結果では、旧形式の「アンニャ」「オマイ」「ワリ」の使用はみられず、「アンタ」はさらに多く用いられている。その中でもn80男は「アンタ」を多用しており、集落外の人物にも用いると回答した。また、対称詞として使用する形式にインフォーマントによる待遇度の認識が違うことが確認できる。「オマエ」を例にとるとn80男は家族（妻と嫁）と年下（50歳代）の男性に対して使っているが、t89女はn家の人物に対して使っており、丁寧度の高い形式として意識している。

ちなみに、丁寧な順に並べてもらった結果は以下のようである。

t89女：オマエ＞オタクサン＞ワカサン＞オトーサン＞ニーチャン＞バーチャン＞アンタ・トーチャン・カーチャン・ネーチャン・名前チャン
n80男：アンタ＞オマエ
t63女：オテラサン＞オマエ＞センセー＞オタク＞アンタ＞名前サン＞オカーサン
t38女：オタクサン＞センセー＞寺号サン＞名前サン＞名前チャン＞バーチャン・オジチャン・オバチャン＞オカーサン

一番若いインフォーマントであるt38女は旅行者に「オタクサン」を使う以外には、基本的に対称代名詞を使用せず、親族名称や「～さん」の類を使うという回答であり、人称代名詞の使用が極度に制限されている標準語（鈴木1973: 129-203他）と同様の運用を行っている。他方、他の3人のインフォーマントの回答をみると、第1次調査時はもとより第3次調査時でも対称代名詞を使用し、標準語的な運用は認められない。さらに、対称代名詞として使用する語彙とその運用の仕方に個人差が大きいという状況である。

4．自称詞

ここでは、話し手が話し相手に対して自己をどのように言うかについて調査した結果を報告する。

調査文 **〈相手から、「これはあなたの傘ですか」と聞かれて〉**
「これはわたしの傘です」と答えるときの言い方を教えてください。

結果は表5に示した通り「オラ」「ワタシ」だけの非常に単純なものであった。話し手によって使用形式が固定されているようで、話し相手による使い分けは見られない。第1

次調査の結果で、中年層以上において老若男女問わず多く用いられていた「オラ」は、現在は、老年層（t89女およびn80男）において同様に用いられることが確認された。対称詞が大きく変わっていることとは対照的である。

また、「ワタシ」は、t63女とt38女によりほぼ一様に使用されるという結果であった。

表５　自称詞　「わたしの傘です」

話し手 / 話し相手	t89女	n80男	t63女	t38女
j101女	●	●	◈	◈
t89女		●	◈	◈
k81女	●	●	◈	◈
n80男	●		◈	◈
n79女	●	●	◈	◈
j78男	●	●	◈	◈
j75女	●	●	◈	◈
t63女	●	●		◈
n54女	●	●	◈	◈
m50s男	●	NR	◈	NR
m50s女	●	NR	◈	NR
k50男	●	●	◈	◈
t38女	●	●	◈	
学校の先生	●	◈	◈	◈
新屋のごぼさま	●	◈	◈	ウチ
旅行者（サト）	●	●	◈	◈
旅行者（県外）	NR	◈	◈	◈

〔凡例〕● オラ　　◈　ワタシ　　NR 無回答

５．話し相手待遇表現

真田（1973）によれば真木方言における動作の主体にかかわる待遇表現の伝統的な体系の概略は次のようなものであった。

待遇表現は大体A、B、Cの三段階に分けることができる。そのうちAとBは敬意のあるものであり、AはBよりも敬意の度合いが高い。Cは敬意を含まないものである。動詞「行く」「居る」「来る」を例にとって示すと次のような体系となる。

	A段階	B段階	C段階
行く	イカッサル	イキャル	イク
居る	ゴザル	ヤル	オル
来る	ゴザル	キャル	クル

第２次真木調査の段階で、若年層においては上記のような三段階の体系からイクと平野

部から進入した新形式イカレルとの二段階の体系へと変化していることが確認されている。

今回の調査では、話し相手待遇において上に示したような状況からのいかなる変化が認められるか、具体的に敬語行動を規定する軸はどんなものと考えられるか、第二次調査時浸透が確認された新形式イカレルの使用状況はどうか、などを明らかにすることを目指した。

調査文 **〈村の道で１対１で会って〉**

「どこへ行くか」と相手の行く先をたずねる時の言い方を教えてください。

調査では、上に記した設定場面における、それぞれの話し相手への表現をインフォーマント各人に内省して答えてもらい、それを記録した。また上述の調査文の他に付帯的な質問として、回答された形式の丁寧順や、昔は使わなかった新形式などについて尋ねた。

調査した結果を表６に示す。

表６　話し相手待遇「どこへ行くか」

話し手／話し相手	t89女	n80男	t63女	t38女
j 101 女	※（昔は〇）	〇	＊	＊
t 89 女		〇	＊	＊
k 81 女	➤（昔は●）	〇＊	＊	＊
n 80 男	➤（昔は●）		➤	＊
n 79 女	➤（昔は●）	＊	●	＊
j 78 男	➤（昔は●）	＊	●➤	＊
j 75 女	➤（昔は●）	＊	＊	＊
t 63 女	＊	＊		＊
n 54 女	➤	＊	＊	＊
m 50s 男	＊	NR	＊	NR
m 50s 女	＊	NR	＊	NR
k 50 男	➤（昔は●）	＊	＊	＊
t 38 女	＊	＊	＊	
学校の先生	➤（昔は●）	➤◆	◆★	◇
新屋のごぼさま	➤（昔は●）	➤◆	★	◇
旅行者（サト）	NR	➤◆	★	◆
旅行者（県外）	NR	➤◆	★☆	◆

〔凡例〕
★オデカケデスカ
☆デカケラレマスカ
●イカッサル
〇イキャル
➤イカレル
◆イカレマスカ・イカレルンデスカ
◇イカレルガデスカ
＊イク
※デカケル

表６からは集落外の人物が話し相手の場合、尊敬語の新形式イカレルや丁寧語などが使用されること（t89女を除く）、集落内の人物に対しては丁寧語が使用されないこと、が共通項としてあげられる。それ以外にインフォーマント間で共通点はあまり認められず、個人差が大きいといえる。

尊敬語の形式に注目すると、イカレルが優勢である。集落内の人物に対しては、伝統形イキャルのみを使用するという回答やイカレルとイカッサルを併用するという回答もあ

った。また、t63女は集落外の人物に標準語形式も使用するとしている。

以下にインフォーマント別に集落内の人物に対する敬語運用上の特徴を記す。

〔t89女〕本人より年下の話し相手にもほぼ一律にイカレルを使用する。普通体を使用する相手は年上の101歳女性、娘、孫娘、新来の集落構成員（m50s男、m50s女）であり、近親者と心理的に疎の人物に限定されるようである。ただし、t89女によればj101女は滅多に出る人ではないので驚きの気持があってこのデカケルの語を用いるとのことである。

〔n80男〕集落内の人物を対象とした敬語運用は年齢を軸としたものであり、使用形式は年長者にイキャル、年少者にイクの２項体系である。

〔t63女〕敬語運用の軸は集落内の人物に関しては社会的地位によると考えられる。尊敬語は本家筋のn家の人物と集落の区長を勤めるj78男に集中している。

〔t38女〕集落内の人物には敬語を全く使わない。「（m家を除く）4軒ともあまりにも近所でみな同じ言い方をする」との内省が得られた。さらに、イカレルに承接する表現に違いがあり、イカレルンデスカとイカレルガデスカでは前者が丁寧で、後者の「ガ」は親しみを込めて言っているように思うと内省している。親疎を軸とした使い分けだと思われる。なお、文末まで見ると母親にはドコイクガ、母親以外の集落内の人物にはドコイクガーと伸ばすということであり、近親者にはパラ言語のレベルで他とは異なる扱いをすることがわかる。

使用語形の丁寧順を内省してもらった結果は次のようであった。（尊敬語部分）

t89女・n80男	イカッサル＞イカレル＞イキャル＞イク
t63女	オデカケ（デス）＞デカケラレル＞イカレル＞イカッサル＞イク
t38女	イカレル＞イク

t89女・n80男とt63女ではイカッサルとイカレルの順位が逆転しており世代差が反映している可能性がある。t63女はイカッサルの方が近しい感じがすると内省している。

昔は使っていない新形式についての質問に対する回答は次のようであった。

	新形式		旧形式
t63女	オデカケデス・デカケラレマス・イカレマス	←	イカッサル
n80男	イカレル	←	イカッサル
t38女	イカレルンデスカ	←	イカレルガー

なおt89女は、一番普通に使う言い方はイキャルであり、イカレルの方が丁寧で、昔も使ったことがあるかもしれないと内省している。実際この内省は、真田（1990: 66,67）図13、14によって検証可能である。1971年調査時にはイキャルを多用していたが、1982年調査時にはイキャルがイカッサルないしイカレルに交替しており、今回のイカレル単独使用（尊敬語形式に関して）に続いている。

上記の回答からは、高年層と青年層で断層があり、高年層では伝統形から新形式への交替が、青年層では新形式内部で終助詞レベルの交替が意識されていることがわかる。

６．第三者待遇表現

行動者が第三者、すなわち話題の主である場合の待遇表現に関しては過去二回の調査では次のようなことが指摘されている（真田1973，1983，1985）。

〔第１次真木調査〕

動作の主体が話題の人物である場合に主として老年層において絶対敬語的運用が認められる。中年層から若年層へと相対敬語的な運用へ移行させていく傾向がある。特に若年層では、体系的枠を単純なものにしていく傾向がある。

〔第２次真木調査〕

① 敬語形式の運用を支配してきた伝統的な家格による規制が急激にゆるんできた。

② 身内尊敬用法の世代間にみられる推移に関して、中年層を緩衝として、老年層の話し手においては尊敬用法が多く、若年層においては非尊敬用法が多い。いずれの場合も対者によってほとんど左右されない。

以上をふまえ、今回の調査では次の２点に留意して実態を把握することを目指した。①話し相手（対者）により第三者待遇での話題の人物に用いる形式を変えるか。同一人物が第三者場面において対者場面とは異なる待遇を受けるか。②第三者待遇で家族の目上を話題にし、他人が話し相手の場合敬語は用いられるか。①は相対敬語化に関わり、②は身内尊敬用法に関わる観点であり、①は話し相手待遇の調査結果と比較することによって検討が可能である。

調査文の１例を次に示す。インフォーマント全員に、集落の最年長者であるj101女、本家の当主であり元村長で社会的地位が高いn80男、および最年少者であるt38女（ただし他集落へ嫁入）を話題の主として想定してもらって尋ねた。さらにインフォーマントのうちt63女とt38女には、集落構成員全員を話題の主として想定してもらって尋ねた。

調査文【話題の主：＃＃＃（=屋号）の大おばあちゃん（=j101女性）】

〈相手から、「＃＃＃（=屋号）の大おばあちゃんは居るか」と聞かれて〉

「居るよ」と答える時、「居るよ」のところをどう言いますか。

他に、話し相手待遇と同様の付帯的な質問を行った。

j101女、n80男、t38女を話題の主として尋ねた結果は表７の通りであった。

表７　第三者待遇「居るよ」―話題の主別―

	話し相手 ＼ 話し手	j 101 女	t 89 女	k 81 女	n 80 男	n 79 女	j 78 男	j 75 女	t 63 女	n 54 女	m 50s 男	m 50s 女	k 50 男	t 38 女	学校の先生	新屋のごぼさま	旅行者（サト）	旅行者（県外）
話題の主：j 101 女	t 89 女			＊｜	◁	●	＊｜	＊｜	＊	◁●	＊｜	＊｜	＊｜	＊｜	◁	◁	NR	NR
	n 80 男		＊	＊		＊	＊	＊	＊	＊	NR	NR	＊	＊	◁	◁	NR	NR
	t 63 女		○	○	◁>●	◁	◁	◁		◁	◁	◁	◁	◁	☆	★	★	★
	t 38 女		◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
話題の主：n 80 男	t 89 女	●		●		●	●	●	●	◁	●	●	●	●	●◁	●◁	NR	NR
	t 63 女	●	◁	●		◁	◁	◁		◁	◀	◀	◀	◁	★	★	★	★
	t 38 女	◁	◁	◁>◀		◁>◀	◁>◀	◁>◀	◁	◁>◀	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
話題の主：t 38 女	t 89 女	＊		＊	｜＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊		♭	♭	NR	NR
	n 80 男	＊	＊	＊		＊	｜＊	＊	＊	＊	NR	NR	＊		♭	♭	NR	NR
	t 63 女	｜	＊	＊	＊	＊	｜	｜		＊	｜	｜	＊		♪	♪	♭	♭

〔凡例〕●ゴザル・キテゴザル　○ヤル　◀オイデマス　◁オイデル　＊オル・キトル
★イラッシャイマス　☆イラッシャル　♭イマス・キテ（イ）マス　｜イル　♪オリマス

表７からは一見して、n80男が話題の主の場合には、誰が話し相手であっても、高い敬意を表す形式が回答されていることがわかる。話し相手待遇で集落内の人物に丁寧語は用いないという回答だった（表６参照）のに、t63女、t38女の回答にオイデマスの形式が現れていることは注目に値する。t89女はn80男に話し相手待遇では新形式イカレルを、第三者待遇では伝統形式ゴザルを使用するとしている。

使用語形（尊敬語部分）の丁寧順を内省してもらった結果は次のようであった。

t89女　オイデル＞ゴザル＞イル＞オル

n80男　オイデル＞オル

t63女　イラッシャル＞ゴザル＞オラレル＞オイデル＞ヤル＞イル＞オル

t38女　イラッシャル＞オイデル＞イル＞オル＞

オイデルとゴザルの順位はt89女とt63女の間で逆転している。

個人の運用に目を向けると、話し相手の社会的地位の高さに連動して尊敬語を用いる例が認められる。t89女はn家の人々や学校の先生、僧侶が話し相手の場合、一段階高い尊敬語を使用している。その傾向は他の３人にも認められる。また、t63女は新しく集落構成員となったm家の人々を相手にした場合も丁寧語を使用すると回答している。

t63女とt38女に対する全数調査の結果を表８と表９に示す。（第一回答のみ表示）

表８　第三者待遇「居るよ」―話し手・t63 女性―

話題の主＼話し相手	j 101 女	t 89 女	k 81 女	n 80 男	n 79 女	j 78 男	j 75 女	t 63 女	n 54 女	m 50s 男	m 50s 女	k 50 男	t 38 女	学校の先生	新屋のごぼさま	旅行者（サト）	旅行者（県外）
j 101 女		○	○	◁	◁	◁	◁		◁	◁	◁	◁	◁	☆	★	★	★
t 89 女	＊		＊	＊	○	＊	＊		○	＊	＊	＊	＊	♪	♪	♪	♪
k 81 女	○	○		◁	◁	◁	◁		◁	◁	◁	◁	○	★	★	★	★
n 80 男	●	◁	●		◁	◁	◁		◁	◀	◀	◀	◁	★	★	★	★
n 79 女	◁	●	◁	◀		◁	◁		◁	◁	◁	◁	◁	★	★	★	★
j 78 男	◀	◁	◁	◀	◀		◁		◀	◁	◁	◀	◁	★	★	★	★
j 75 女	◁	｜	◁	◁	◁	◀			◁	◁	◁	◀	◁	★	★	★	★
t 63 女																	
n 54 女	◁	＊	◁	◁	◁	◁	◁			◁	◁	◁	◁	★	★	★	★
m 50s 男	○	○	○	◁	◁	◁	◁		◁		◁	○	○	♭	♭	♭	♭
m 50s 女	○	○	○	◇	◇	◁	◁		◇	◁		◁	◁	♭	♭	♪	♪
k 50 男	○	○	○	◁	◁	◁	◁		◁	◁	◁		◁	★	★	◇	◇
t 38 女	｜	＊	＊	＊	＊	｜	｜		＊	｜	｜	＊		♪	♪	♭	♭

〔凡例〕
★イラッシャイマス
☆イラッシャル
●ゴザル
○ヤル
◀オイデマス
◁オイデル
◇オラレマス
＊オル
♭イマス
｜イル
♪オリマス

表８を見ると、t63女は「居る」という意味を表すのに実に多種類の形式を用いていることが印象的である。その中で集落内の人物が相手の場合はオイデルとオイデマスを、集落外の人物で県外の旅行者が相手の場合はイラッシャイマスを多用するとしている。

集落内の人物でオイデマスが使用されるのはn家の夫婦と、j家の夫婦を話題にした場合で、かつ、n家やj家、m家の人々、k50男を話し相手とした場合である。n家の人々を話題にした場合で、かつ、高齢者が話し相手の時ゴザルが使用されることもある。

身内の目上である母親が話題の主の場合、集落内の人物が話し相手ならオル・ヤルを用い、外部の人なら謙譲語のオリマスを用いる。後者は標準語の運用に則った用法である。オイデル、オル、ヤルは親しさのマーカーである可能性がある。

表９からt38女の運用はかなりシンプルなことがわかる。身内を除く集落構成員を話題にしてオイデルを、集落外の富山県内の人物にオイデマスを、富山県外の旅行者にイラッシャイマスを一律に用いる。話し相手待遇で集落内の人物に敬語を用いなかったことを考えると興味深い運用である。身内の目上に尊敬語を全く使用せず、集落外の人物が相手の時謙譲語も使用する。

表９　第三者待遇「居るよ」―話し手・t38 女性―

話し相手 ＼ 話題の主	j 101 女	t 89 女	k 81 女	n 80 男	n 79 女	j 78 男	j 75 女	t 63 女	n 54 女	m 50s 男	m 50s 女	k 50 男	t 38 女	学校の先生	新屋のごぼさま	旅行者（サト）	旅行者（県外）
j 101 女		◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
t 89 女	＊		＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	NR	NR	＊		♭	♪	♪	♪
k 81 女	◁	◁		◁	◁	◁	◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
n 80 男	◁	◁	◁		◁	◁	◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
n 79 女	◁	◁	◁	◁		◁	◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
j 78 男	◁	◁	◁	◁	◁		◁	◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
j 75 女	◁	◁	◁	◁	◁	◀		◁	◁	NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
t 63 女	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊		＊	NR	NR	＊		♭	♪	♭	♭
n 54 女	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁		NR	NR	◁		◀	◀	◀	★
m 50s 男	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR		NR	NR		NR	NR	NR	NR
m 50s 女	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR	NR		NR		NR	NR	NR	NR
k 50 男	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	◁	NR	NR			◀	◀	◀	★
t 38 女																	

〔凡例〕
★イラッシャイマス
◀オイデマス
◁オイデル
♭イマス
＊オル
♪オリマス

７．まとめ

前節まで述べた第３次調査の結果をまとめると、以下のようになる。

まず、第一に言えることは敬語運用の軸は個人差の大きいものとなり、集落固有の運用体系はみえにくくなった、ということである。ただし、その運用は言語項目間で軌を一にしているというわけではない。

たとえば対称詞に関しては、旧形式の使用が消え、２次調査から現れた新形式「アンタ」がさらに増加していた。従来の家格による使い分けは高齢のインフォーマントを除いて認められなくなり、インフォーマントによっては親疎やウチソトを意識した運用も認められた。さらには、青年層で対称代名詞をほぼ使用しない標準語の場合と同じような運用が認められた。

自称詞は話し手によって使用形式が固定され、話し相手による使い分けは認められなかった。

話し相手待遇では、心理的親疎、社会的地位、年齢、親疎を軸とする運用が認められた。

第三者待遇では、身内尊敬用法は今回のインフォーマントに関する限り認められなかった。青年層回答者に、集落構成員に面と向かって話す場合は一律に普通体を用いるのに、第三者待遇で尊敬語を用いるという近畿中央部方言的な運用[3)]が認められた。

第二に、第２次調査で浸透が認められた当時の新形式「アンタ」「イカレル」「オイデル」の勢力は拡大傾向にある。その一方で、標準語の敬語形式が多数進入していることが認められた。１例をあげれば、地域の言語生活に過去２回の調査で現れなかった共通語の丁寧

語形が進出してきた。話し相手待遇では、集落外の人物に対してだけ使用されており、集落構成員にはまだ使用されていない。第三者待遇では、集落構成員が話し相手で集落内の人物を話題にして丁寧語が現れ始めた。集落外の人物に対し身内に言及して謙譲語も現れている。

第三に、伝統的な形式は人称代名詞では姿を消し、尊敬語「イカッサル」「イキャル」「ゴザル」「ヤル」が高年層に残存している。二人称代名詞の敬意が高い伝統形「オマイ」は「オマエ」と形を変えてインフォーマントにより待遇価値が異なるという状態で使用されている、という例もある。その「オマエ」と「アンタ」、「イカッサル」と「イカレル」、「オイデル」と「ゴザル」の間ではインフォーマント間に待遇価値のゆれが認められた。

3次にわたる調査により真木集落における敬語運用の過去36年間の変容をまとめると、家格による絶対敬語的運用〔第1次調査時〕、年齢を軸とした敬語運用〔第2次調査時〕を経て、2007年の今回の調査時において「待遇表現体系の拡散」の様相を呈している、と総括できる。

ここで、今回の調査で明らかになった当該集落の待遇表現体系が「拡散」している現今の状況と背景にある社会構造との関わりについて考えてみたい。

かつて五箇山郷では真木集落を含めて、地理的条件等により外界から隔絶した環境のもと、合掌造りの家屋に大人数の家族がまとまって住んで共同して生業を営み、雪下ろしなどの作業は一家で力を合わせ、一家では担いきれないかやぶき屋根の葺き替えなどの作業には集落単位で力を合わせるという形で自給自足的な生活を営んでいた。そのような時代には、集落構成員の結束も固く、社会的上下関係も固定的で、結果として言語行動も強く規制されていたと考えられる。しかし、1970年代以降の道路の拡張、近くの発電所の建設などで生活が便利になり、働き口も増え、それにともない生計を立てる手段、経済的基盤も集落外に広がっていった[4)]。その結果、相対的に村落共同体への依存度は少なくなっていったと考えられる。さらに当地の観光地化の進行、この時代に一般的な情報化や教育事情は外界との接触の機会を格段に増やし、集落構成員は多様な価値観に触れることとなったであろう。その一方で、急激な過疎化は人口集落単位の共同作業を困難にし、行政や集落横断的な組織など外部への依存度を高める結果となったと考えられる。このような外的条件の変化が集落内の待遇表現体系の均一的な体系からその拡散へという変化をもたらした大きな要因であろう。

本稿で報告したような3次36年間にわたって一地点の敬語行動をリアルタイムで追った経年的調査はこれまで類をみないものである。少人数ながら個人の敬語使用語彙や運用枠組みの年齢による変化を具体的に示したことと合わせて、本研究が敬語行動の変化、言

語変化研究に寄与することが望まれる。

注

1）真田（1973, 1990）によると、ここでいう「家格」とは、財産、教養及び役職の有無などを段階的に数量化した社会的階層とは異なる、集落の伝統的な家柄、いわゆる「等差」に基づくものとされる。

2）大野晃が1991年に提唱した用語で65歳以上人口比50%以上の高齢化が進み、共同体の機能維持が限界に達している状態にある集落のこと。大野晃（2005）『山村環境社会学序説』社団法人農山漁村文化協会

3）宮治（1987）では、「近畿方言では、面と向かって話す場合よりも、第三者として話題にする場合に素材待遇語が多用される」ことを指摘している。京都市方言でも話し相手待遇で普通体を使用するくだけた場面において、第三者待遇では話題の主に広範にハル敬語が適用される（辻2001）。

4）交通事情の劇的な変化についていえば、1980年代後半くらいまで手こぎの船を乗り継いで平野部に出るという状況だったのが、現在では道路が開通し、冬場でも除雪車が軒先まできて除雪してくれるようになり、平野部への通勤も可能だ、とのことである。

また、調査時に収録した談話の中で劇的な生活の変化を話者は次のように語っている。

［以下の談話の丸数字は談話番号、三桁のアラビア数字は発話番号、アルファベットは話者ID。BBC＝t63女、RTJは調査者］

②084BBC：たいてい　うん。　／少し間／　やっぱり　そーゆー　基盤整備したりー　（RTJ：うん）　道路　拡張したりしてー、（RTJ:うん。　うん。　うん。）　うん、　生活が　｛笑いながら｝　全部　変わってってしまった。　うん。

変化の一例を挙げると、雪下ろし作業を大家族の人手に頼っていた時代から現在の自動化された状態への変化について話者は次のように語っている。

①004BBC：まず　屋根雪を、（RTJ：屋根雪）　お　下ろさなくても　良くなったの。

①005RTJ：へーーっ。　ど　どうして［↑］。

①006BBC：あの　屋根　改造して。　（RTJ：へー　あの　でも、　あの）　あの　うん。　そんなうちも　あるけどー、（RTJ：うん）　うん。　全部、とは　ゆわないけど…　うん。

①007RTJ：うんうんうんうん。　ふーん。　それ　でも　ものすごく　｛強調して｝　大きいですよね。　あの　冬の　寒い時に　こう　屋根おろしって　ほんと　大変でしょ［↑］

①008BBC：そうそう。（RTJ：えー）　うん。

①009RTJ：ひとでー《人手》を　頼んでたんですか［↑］　昔は。

①010BBC：むか　うん　そんな　うちも　あるけ（＋ど）　たいてい　やっぱり　家族が　（RTJ:自分で［↑］　あー）　たくさん　住んどった《住んでいた》からー、（RTJ：はー）　うち　うちじゅう　家族　何人か　あ　上がってー　（RTJ：あー　なるほどね）　うん。

①011RTJ：ふーん。　あのー　今の　お宅は　じゃあ、　角度のせいで、　改造　ってゆーのはね　屋根の改造　ってゆーのはね　（BBC：うんうん）　あの　まず　素材が　違うんですよね［↑］　きっと。

①012BBC：そー。　瓦の人はー　（RTJ：うん）　下へ　電気を　入れたり、　して　瓦の下へ　（RTJ：はーはー）　電気を　入れたり　瓦の上に　（RTJ：うん）　電気を　入れてー、

（RTJ：うんうん） スイッチ 入れとくとー （RTJ：うんうん） 降ったが《降ったの》が 溶けててくー。 わたし達みたいに こう と あの、 ステンレスとかトタンにする は、（RTJ：うん。 うんうん） 自動に ザーッと 落ちる。 降ったが《降ったの》から 順番に 落ちる。 （RTJ：えーっ。 そーなんですか） そのかわり 下に 溜まるもんで 水を 流して… うん。

参考文献

上平村役場企画（1995）「写真でつづる百年の歩み」『上平村制百周年記念誌』

姜錫祐（1997）「越飛国境域における待遇表現―対称代名詞と「行く」の表現形を中心に―」真田信治編『五箇山・白川郷の言語調査報告』科学研究費報告書.

真田信治（1973）「越中五ヶ山郷における待遇表現の実態―場面設定による全員調査から―」『国語学』93.（真田1990に再掲）

――――（1983）「最近十年間の敬語行動の変容―五箇山･真木集落での全数調査から―」『国語学』133.（真田1990に再掲）

――――（1985）「北陸方言での身内尊敬用法の推移」『椙山国文学』9.（真田1990に再掲）

――――（1990）『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院.

――――（1997）「階層性から一律化へ、そして標準化へ―五箇山親族呼称の60年―」『阪大日本語研究』9.

下野雅昭（1983）「10 富山県の方言」飯豊毅・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学６―中部地方の方言』国書刊行会.

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書.

高桑敬親（1939）『民俗学的・土俗学的にみた五箇山方言』（1996近畿方言研究会編『地域語資料２ 民俗学的・土俗学的にみた五箇山方言』として翻刻）

辻加代子（2001）「京都市方言・女性話者の『ハル敬語』―自然談話資料を用いた事例研究―」『日本語科学』10.

宮治弘明（1987）「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151.

付記

本稿は、日本方言研究会第86回研究発表会（於日本大学）での口頭発表に加筆修正を施したものである。発表に際し御意見を賜わった方々に心から感謝申し上げます。また、調査に協力してくださったインフォーマントの方々、ならびに調査を全面的に後援してくださった真田信治先生、ともに調査を行い議論したフィールドワーク参加者にも厚くお礼申し上げます。

辻（修了生・神戸学院大学准教授）

金（修了生・本学特任研究員）

（2008年８月22日受付）

（2008年９月25日修正版受付）

（2008年10月15日掲載決定）